はじめに

“一つのことを私は主に願った。それを私は求めている。
私のいのちの日の限り　主の家に住むことを。
主の麗しさに目を注ぎ　その宮で思いを巡らすために。”
（新改訳 2017　詩篇 27 篇 4 節）

この聖書箇所は、ダビデ王が書いたものです。ダビデにとって最大の祈り、願いは、偉大な王になることでも、巨万の富を築き上げることでもありませんでした。彼が願ったただ一つのこと、それは「いのちの日の限り、主の家に住まうこと」でした。この「主の家に住む」とは、絶えざる主の臨在、主との交わりの中に生きることです。そして、この願いこそ彼の生涯を一貫して貫いている信仰でもあったのです。
ダビデにとって主との交わりに生きることは、何にも代えがたい喜びであり、生きがいであったのです。主はそれゆえ、ダビデの生涯を豊かに祝福してくださったのです。

現代クリスチャンにとっても、主の臨在、主との交わりの中に生きることは何にも勝る喜びであり、生きがいであります。

“一人ひとりが、その日毎の信仰の歩みの中で、この交わりの豊かさ、喜びを味わって頂きたい、そしてもっと深くインマヌエルの主を覚え、主の臨在の中に生きて欲しい”という願いをもって、この「静思の時」が作成されています。

主の臨在信仰が失われ、誤った安易な形で、しるしや奇跡の中に主の臨在を求めようとする今日の時代にあって、主のみことばに根差し、主のみことばと共に働かれる生きた聖霊の働き、聖霊の導きを味わいたいと願っています。主は今日も生きておられます。そして、変わる事のない主のみことばを通して、私たち一人ひとりにご自身の御心をいつも語りかけておられるのです。
日毎に、その細き御声を聴き、そのみことばに従う事を通して、生きて働かれる主の臨在に触れて行きましょう。

このディボーション（静思の時）が、「救われるために毎日しなければならない」、「すべて終わらせないと成長できない」などといった律法や義務や弟子訓練マニュアル法とならないようにしたいものです。このノートをうめること、このノートに書くことが目的ではありません。このノートを通して、生きた主ご自身と交わり、生きた主のみことばに出会い、そのみことばに生きることこそ、真のディボーション（静思の時）なのです。

一人ひとりがこの「静思の時」を通して、自分の心で主のみことばを思い巡らし、生ける主との深い臨在にふれ、主と主のみことばに生きる幸い、喜びを味わわれることを心から願っています。